

魔法の種 プロジェクト 活動報告書

報告者氏名:目黒区立中目黒小学校 所属:佐生彩 記録日: 2017年 2月 24日
キーワード:学び方、コミュニケーション

【対象児の情報】

○学年

小学5年生の女兒

○障害と困難の内容

- ・LDの疑い
(想起の苦手さ、語彙の狭さ、ワーキングメモリーの弱さから、学力の定着に時間がかかる)

【活動目的】

○当初のねらい

- ・学び方の選択肢を広げることで、自己解決できる場面を増やす。
- ・画像や動画を活用することで、イメージをもって学習できるようになる。
- ・伝える方法を増やすことで、思いを伝え合ったり気持ちを共有したりする経験を重ねる。

○実施期間

H28年5月～2月

○実施者

佐生 彩

○実施者と対象児の関係

特別支援教室(通級)担任

【活動内容と対象児の変化】

○対象児の事前の状況

<書くこと>

- ・漢字の読みは覚えられるが、へんやつくりを正確に覚えるのに繰り返し練習が必要である。選択肢を与えると正しい字を選ぶことができる。
- ・自分の思いを文章にまとめていくことが苦手である。

<読むこと>

- ・教科書のように何度も読んでいるものは、正しく読むことができ、意味も分かる。しかし新出漢字や普段あまり出てこない漢字は読み間違えることがある。

<計算>

- ・たし算、ひき算は、暗算・ひっ算ともに時間がかかるが、解くことができる。
- ・かけ算、わり算のやり方自体は理解しているものの、手順が複雑になることや、桁をそろえることなどが難しく、時間がかかる。そのため、計算するのに時間がかかり、黒板の内容をノートに書き写す時間が少なくなることがある。
- ・文章題は読んだだけでは分からなかったり、計算を解いている途中で作業に混乱してしまったりすることもあるが、説明すると思い出して最後まで解くことができる。

<コミュニケーション>

- ・体を動かして遊ぶことを好み、同学年の女子児童と教室で過ごすことより、外遊びをする方が好きである。
- ・教室では友達がミニ先生となり、算数では表をかくてヒントをあげるなど、学習アシストしてくれている。

○活動の具体的内容

<書くこと>



「simple mind」

- ・状況や気持ちをマインドマップで整理し、作文を書く練習をする。
- ・状況や気持ちを関連付ける練習をし、想起の苦手さを支える。



「筆順辞典」

- ・読み方や書き方が分からないときに漢字を検索する。
- ・作文を書くときに分からない漢字がある場合、漢字で書きたい読み方をひらがなで打ち込み、検索する。選択肢があると正しい漢字を選ぶことができる。

<読み>



「デイジーポッド」

- ・音読の補助をし、漢字が読めないことへの負担を減らす。



「タッチアンドリード」

- ・文章の読み取り機能を使い、コラムなどの少し難しい文章を聞くことで理解できるようにする。



「NHK for school」

- ・社会と理科の事前学習をして、学習内容の予習・復習をする。

<計算>



「ゆび・ひっさん」

- ・単元ごとにかけ算や割り算の計算方法や筆算方法を分解して説明してくれている。ゲーム感覚で計算練習ができる。

<コミュニケーション>

「By talk」



• 毎日会えるわけではないので、日々のコミュニケーションを取り合うツールとして活用する。日常の連絡を取り合い、感情表現をする機会を増やす。



「国語辞典」

• 分からない言葉を検索し、言葉の理解を補助する。

○対象児の事後の変化

様々な領域でiPadの活用を試したが、なかなか定着しなかったため、中間報告以降はマインドマップを活用した作文指導に絞り、指導を続けることにした。

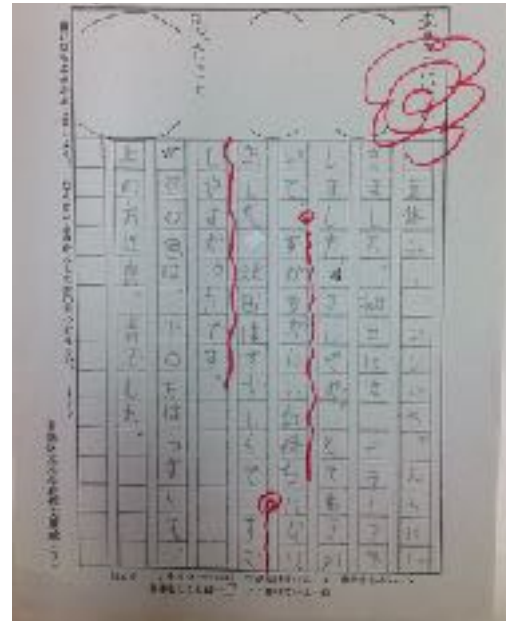


「マインドマップ」

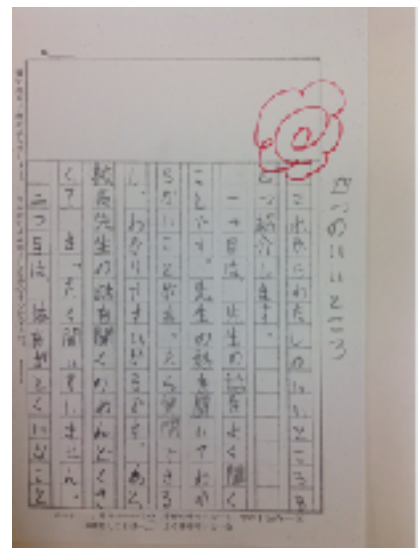
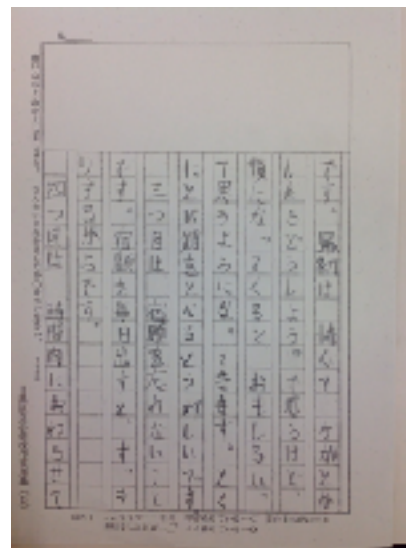
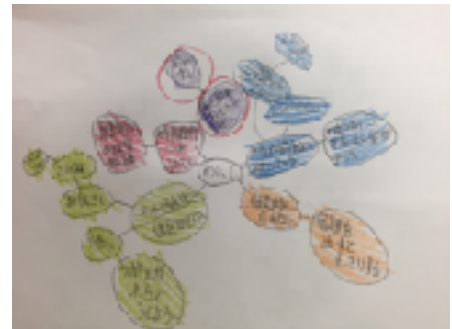
(1)初めてのお題は児童が前日の夕食に食べた「ハンバーグ」を設定した。「おいしい」というキーワードはすぐに出てきたが、それ以外の感想や様子は出てこない。「ソースが美味しかった?」「見た目はどうだった?」など具体的に質問した。すると、昨日のハンバーグを思い出し、キーワードを増やすことができた。その後はマインドマップのキーワードを繋げて作文を書くことができた。



(2)4回目は夏休み中に秋田の祖父の家へ行った時の写真を見ながら、夏休みの思い出を伝える作文を書くためのマインドマップを作成した。一人ではキーワードが繋がらなかったが、教師のマインドマップの例を見せると、どのようなことを書けば良いのかイメージが湧き、マップを広げることができた。作文に書きたい項目ごとに色分けし、作文を書けるようになった。



(3)マインドマップをアプリではなく、手書きで作るようになった。以前は二日間で書いていたが、1時間で作り終えるようになった。アプリで作るよりも早くなり、手を動かした方が思考と繋がりがやすくなった。





「筆順アプリ」
「国語辞典」
「safari」



- 作文を書くときに分からない漢字がある場合、漢字で書きたい読み方をひらがなで打ち込み、検索した。選択肢があると正しい漢字を選ぶことができる。
- 「筆順辞典」だけでなく、場面に合わせて「例解国語辞典」「Safari」を選んで調べられるようになってきた。分からない漢字があるとすぐに調べる習慣が付き、既習漢字を使用する回数が増えた。

【報告者の気付きとエビデンス】

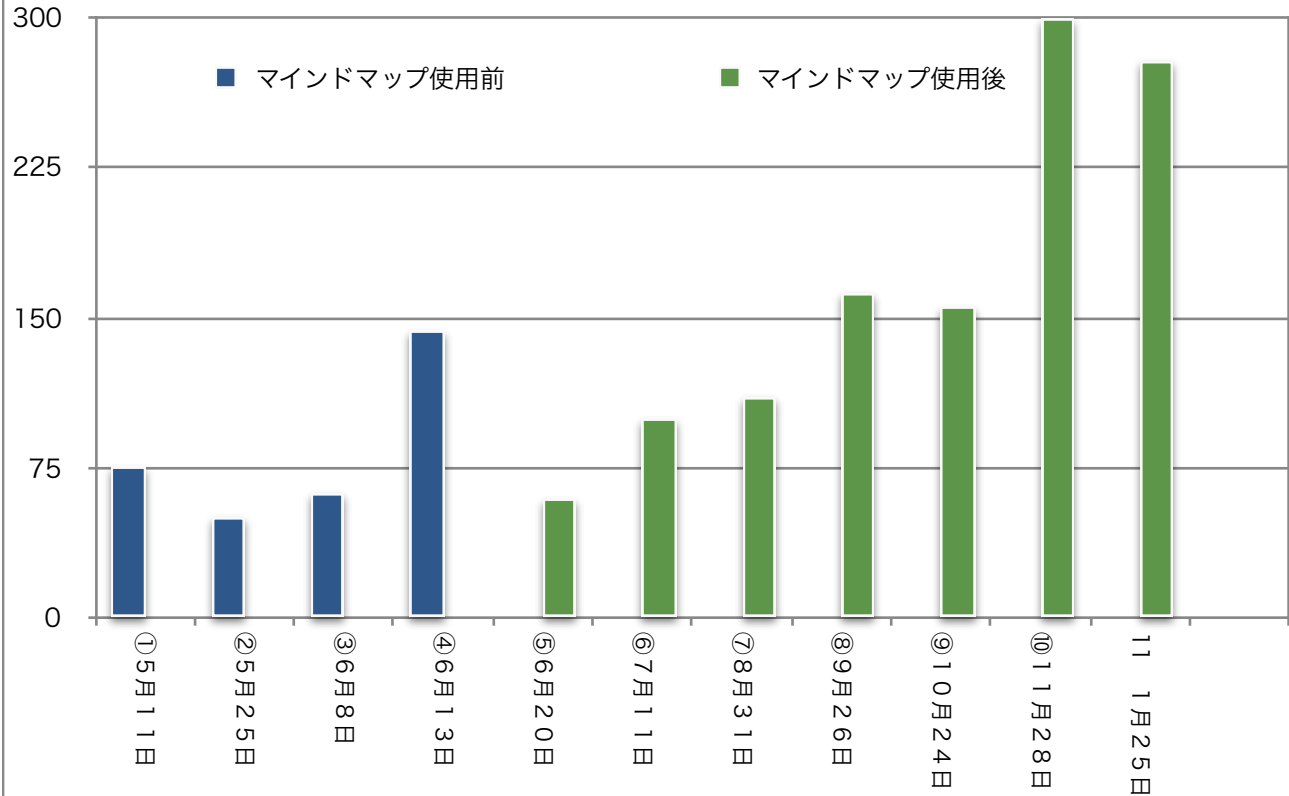
○主観的気付き

- 「調べるときはiPadの方が便利だが、作業をするときは実際に手を動かした方が考えや思いがまとまりやすい。」と、iPadを使用することにより、自分に合った学習の方法を考えるようになってきた。
- 本児にとってiPadは漢字や分からない言葉を検索する際に「あったら便利なもの」であったが必ずしも必要な道具ではなかった。しかし今回のプロジェクトを通して、自分のやりやすい学習方法を見つけていく楽しさを学ぶことができた。

○エビデンス(具体的数値など)

- ・マインドマップで出来事や気持ちを表現できるようになり、関連付けや想起もできるようになってきた。もっと書きたい!という意欲がわき、作文の文字数が増えた。
- ・始めはアプリを使用してマインドマップを作成していたが、「手書きの方が速くて思ったことを書ける。」という本児の意見より、iPadと手書きをやりやすいように使い分けている。

作文の文字数の変化



○その他のエピソード

・本児の学級の漢字テストは、学級担任が文章を言う→聞く→書くスタイルなので、本児は文章を覚えることに必死で漢字に変換する余裕がなかった。どのようなテストならやりやすいか考え、漢字テストの右側にひらがなで文を書くことにした。始めは私が作り、担任に渡していた。ある日、漢字テストの振り返りをしたときに、「ひらがなが書いてあるだけでは、どれを漢字に直すのか分からない。」という困り感を伝えてきた。そこでドリルと同じようにひらがなの横にサイドラインを引く方法を提案した。その時から自分で漢字テストの前日に自分用のテストプリントを作るようになった。自分で作るテスト用紙を始めは鉛筆で書いていたため、消しゴムで消すとせっかく書いたひらがなまで消えてしまうという問題を抱えていた。ボールペンで書けば消しゴムで消えないことを私が提案すると納得し、ボールペンでテスト用紙を作るようになった。このように、自分に合った学習スタイルを考え、担任に相談できるようになった。

・発達検査の結果を本児・心理士・学級担任・通級担任でフィードバックする機会を設けた。データを基に得意なことと苦手なことを知り、得意なことを生かして苦手なことをカバーする方法を考えた。周囲の目は気にしていたが学級担任からのフォローもあり「自分なりのやりやすい学習方法をやってみたり相談したりしていいんだ」と思えるようになった。